

Title	『すぎし年月の物語』の成立：研究史概観
Author(s)	国本, 哲男
Citation	大阪外国語大学学報. 15 p.51-p.72
Issue Date	1965-02-15
oaire:version	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/80242
rights	
Note	

Osaka University Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

Osaka University

『すぎし年月の物語』の成立

(研究史概観)

国 本 哲 男

СОСТАВЛЕНИЕ «ПОВЕСТИ ВРЕМЕННЫХ ЛЕТ»

(Историография)

КУНИМОТО Тэцую

«Повесть временных лет», или «Начальная летопись» — это самый важный источник для изучения первых веков русской истории. Ее составляли в начале XII века в монастырях с определенными политическими и религиозными идеологиями, как в Японии составляли первую историю «Кодзики» при дворе. Чтобы правильно использовать такие тенденциозные произведения как источники, прежде всего надо выяснить объективность каждого известия, сравнивая варианты, включенные в разных списках.

В России и Советском Союзе уже 200 лет десятки ученых изучают русские летописи. Из них самую важную роль играет А.А.Шахматов: его реконструкция древнейших сводов и схема составления летописей. Большим трудом Шахматова в основном был разрешен вопрос о составлении «Повести временных лет», имеющей три редакции в 1113, 1116 и 1118 годах. Теперь внимание исследователей обращается на разыскание о начале историографии в России.

われわれがいま、年代記を史料として利用できるのは、数十人にのぼるロシアの学者が、200年にわたって、綿密に、注意ぶかく、年代記の複雑にもつれた糸をときほぐしてきたからにはほかならない。^⑩

ル イ バ コ フ

まえがき

ロシア中世史の初期を研究するにあたって、ロシア語で書かれたまとまった史料として一群の『ロシア年代記』がはたす役割は、日本史における『古事記』、『日本書紀』のばあいと同じである。これら年代記のうち、いちばん古い写本に残されているのは、『ノヴゴロド第1年代記』のシノド本であるが、それは初めの方が欠けており、1016年の項の途中から始まっている。まとまったものとしていちばん古いのが、『すぎし年月の物語』（『ネストル年代記』、『原初年代記』ともいわれた）である。

その成立事情は、『古事記』、『日本書紀』にはなほだ似ている。いずれも最初の国家が確立してまもない時期に、強烈な政治的意図のもとに、国家のなりたちを支配階級の立場から編集したものである。しかも、政治的傾向性の点ばかりでなく、そこにのべられた記事には、編集年代をはるかにさかのぼる事件に関係したものがあり、その点からも客観性のまことに薄いものが少なくない。

したがって、このようなきわめて主観的な『歴史書』を史料として利用するにあたっては、まず、それぞれの記事がどの程度客観的事実を反映しているのかを検討しなければならない。つまり、年代記の史料批判から手をつけなければならないのである。そのためには、さまざまな写本に含まれている年代記の異文を綿密につきあわせ、それを他の年代記や史料と比較することによって、各記事の原形を復元しなければならない。しかし、それにはまず年代記の成立事情を解明しておかなければならない。つまり、年代記が、いつ、だれの手によって、どのような意図のもとに、どのような素材をつかって編集されたのかを、明らかにしなければならないのである。

わが国では長い伝統をもつ記紀の研究、とくに津田左右吉氏の業績を土台にして活発にくりひろげられた戦後の研究の結果、記紀の記事をそのまま事実として受けとりえないことは、もはや常識になっている。ソ連邦においてもやはりそうであり、200年にわたる年代記研究、とくにシャマトフの業績を土台とする最近の研究によって、『すぎし年月の物語』（つまりロシアの『古事記』）の記事が事実を客観的に反映していないことは、常識になっている。

ところが、わが国のロシア中世史研究者のなかには、年代記の記事の信憑性には一応疑問をもちながらも、なおその記事をそのまま引用して論拠とするものがあり、年代記の研究は、はなはだ立ちおくれた状態にある。

そこで、この小論においては、ロシア年代記研究の手がかりとして、まず年代記の成立事情をとりあげることにした。これについては、最近ルイバコフが詳細な研究、『古ルシ——説話、ブリリーナ、年代記』(1963年)^⑨を發表している。しかし、それを紹介・批判するまえに、ロシアとソビエトにおける年代記研究の歴史を明らかにしておかなければならない。ルイバコフの労作は、200年の研究をふまえ、その先端に立っているからである。

タチシチェフに始まる年代記研究のうち、おもなものは、つぎのとおりである。

Татищев В.Н. История российская с самых древнейших времен, кн. 1. М., 1768

Шлецер А.Л. Нестор, т. I—III. СПб., 1809-1819

Карамзин Н.М. История государства российского, СПб., 1816-1817

Перевошиков В.М. О русских летописях и летописателях по 1240 г. (《Материалы по истории российской словесности》, СПб., 1836)

Погодин М.П. Исследования, лекции и замечания, т. I. 《Нестор》 М., 1846

Соловьев С.М. История России с древнейших времен, т. I—V. М., 1851-1855

Сухомлинов М.И. О древней русской летописи как памятнике литературном. (《Ученые записки Второго отделения Академии наук》, кн. 3, отд. II, СПб., 1856)

Костомаров Н.И. Лекция по русской истории, ч. I. (《Источники русской истории》, СПб., 1861)

Срезневский И.И. Читения о древнерусских летописях, СПб., 1862

Бестужев-Рюмин К.Н. О составе русских летописей до конца XIV в. СПб., 1868

Оболенский М.А. Несколько слов о первоначальной русской летописи, М., 1870

Ключевский В.О. Курс русской истории, ч. I. (лекции 5, 6) 1904 (1956, стр. 74-101)

Иконников В.С. Опыт русской историографии, т. II, кн. 1. Киев, 1908

Шахматов А.А. Разыскания о древнейших русских летописных сводах, СПб., 1908

Шахматов А.А. Нестор летописец. (《Записки наукового товариства імени Шевченка》, т. CXV II, Львів, 1913, т. CXV III, 1914)

Шахматов А.А. 《Повесть временных лет》, т. I. Пг., 1916

- Шахматов А.А. «Повесть временных лет» и ее источники. («Труды Отдела древнерусской литературы Ин-та русской литературы АН СССР», т. IV, М.-Л., 1940)
- Бугославский С.А. К вопросу о характере и объеме литературной деятельности преподобного Нестора. («Известия Отделения русского языка и словесности Академии наук» т. XIX, кн. 1, СПб., 1914)
- Перфецкий Е.Ю. Русские летописные своды в их взаимоотношении, Братислава, 1922
- Истрин В.М. Очерк истории древнерусской литературы домосковского периода, 11-13 вв. («Наука и школа», Пг., 1922, стр. 135-152)
- Присёлков М.Д. Нестор летописец, Пг., 1923
- Присёлков М.Д. История русского летописания XI-XV вв. Л., 1940
- Никольский Н.К. «Повесть временных лет» как источник для истории начального периода русской письменности и культуры. К вопросу о древнейшем русском летописании, вып. 1. Л., 1930
- Адрианова-Перетц В.П., Комарович В.Л. Повесть временных лет («История русской литературы», изд. АН СССР, т. I, М.-Л. 1941, стр. 257-288)
- Греков Б.Д. Первый труд по истории России. («Исторический журнал», 1943, №11-12) («Избранные труды», т. II, м. 1959, стр. 501-518)
- Еремин И.П. «Повесть временных лет», Л., 1946
- Лихачёв Д.С. Русские летописи и их культурно-историческое значение, М.-Л., 1947
- Лихачёв Д.С. «Повесть временных лет», ч. 2. (статьи и комментарии), М.-Л., 1950
- Лихачёв Д.С. Литература. («История культуры древней Руси», т. II. М. 1951, стр. 163-215)
- Лихачёв Д.С. Литература конца X—первой половины XI века, Литература второй половины XI—первой четверти XII века. (АН СССР «История русской литературы», т. I, М.-Л., 1958, стр. 24-86)
- Черепнин Л.В. «Повесть временных лет», ее редакции и предшествующие ей летописные своды. («Исторические записки», 1948, №25, стр. 293-333)
- Гудзий Н.К. История древней русской литературы, изд. 5, М., 1953
- Тихомиров М.Н. Развитие исторических знаний в Киевской Руси, феодально-раздробленной Руси и Российском централизованном государстве. («Очерки истории

- исторической науки в СССР», вып. 1, М., 1955)
- Тихомиров М.Н. Начало русской историографии. (《Вопросы истории», 1960, №5)
- Тихомиров М.Н. Русские летописи. (《Источниковедение Истории СССР», вып. 1, М., 1962, стр. 31-68)
- Рыбаков Б.А. 《Остромирова летопись». (《Вопросы истории», 1956, №10)
- Рыбаков Б.А. Боярин-летописец XII в. (《История СССР», 1959, №5)
- Рыбаков Б.А. Спорные вопросы образования Киевской Руси. (《Вопросы истории», 1960, №9)
- Рыбаков Б.А. Древняя Русь—Сказания, былины, летописи, М., 1963
- Насонов А.Н. Начальные этапы киевского летописания в связи с развитием древнерусского государства. (《Проблемы источниковедения», вып. VII, М., 1959)
- Иллерицкий В.Е., Кудрявцев И.А. Исторические знания в V-XV веках. (《Историография истории СССР», М., 1961)

本来ならば、これらの著作に目を通したうえで、自分の理解にしたがって研究の跡をたどらなければならないのであるが、残念ながら最近のものをのぞき、ほとんど手にすることができない状態である。とくに、シャフマトフの著作が手にはいらないのは、致命的である。しかし、手をこまねいていても仕方がないので、チホミロフが『ソ連邦史史料研究』（1962年）^⑧にまとめている研究史と、利用できる文献とをよりどころにして、『すぎし年月の物語』成立の研究史を紹介することにしたい。

したがって、ここでとりあげるのは、年代記研究の準備にすぎないことを、おことわりしておきたい。

本題にはいるまえに、『すぎし年月の物語』のおもな写本の種類とその特徴を、あらかじめ簡単に説明しておこう。

1. 『すぎし年月の物語』の写本

1. ラヴレンチ本 1377年にスズダリ公ドミトリ・コンスタンチノヴィチのために、修道僧ラヴレンチが書き写したものである。このうち6618 (1110) 年までが『すぎし年月の物語』であり、6619 (1111) —6813 (1305) 年が『スズダリ年代記』になっている。ラヴレンチ本の書きだしは、「これは、どこからルシの国がでたか、だれがキエフにおいて初めに公として君臨し始めたか、そしてどこからルシの国が始まったかの、すぎし年月の物語である」^⑨ となっている（この年代記の名称は、この表題からとられている）。また、6618 (1110) 年の最後のところに、つぎの

「あとがき」がみられる。「聖ミハイルの修道院長シリヴェストルが、神から恵みを受けることを期待しながら、ヴラジミル〔モノマフ〕公の治世に、彼がキエフに公として君臨しているときに、この年代記なる書物を書いた。しかしてそのとき、6624〔1116〕年、インジクトの9年に、われは聖ミハイルの修道院長であった」^⑥。

これは『すぎし年月の物語』の現存する写本としては、もっとも古いものではあるが、ラヴレンチが古くなった写本から写筆したために、読みとりにくい個所があり、誤りや欠除が多い。とくに6406 (898) 年の終りの方から6429 (921) 年までが欠けている。写本はムシン・プーシキン伯からアレクサンドル1世に献上され、勅命によってペテルブルク公共図書館に保管された。

2. ラジヴィル本 (ケニヒスベルク本) ラヴレンチ本の欠除をおぎなううえで、重要な写本である。15世紀末に書かれているが、より古い、13世紀初めの写本から写されたものと思われる。記事は1206年で終わっている。この写本にも誤りや欠除が少なくない。これは、13世紀の写本から写された多数の絵 (604 図) を含んでいることで有名である。それは稚拙ではあるが、古ルシの生活を知るうえで、きわめて貴重な史料をなしている。

ラジヴィル本は17世紀にリトワ公ボグスラフ・ラジヴィル公によって所有されていた。彼は1671年に、それをケニヒスベルク図書館に寄贈している。1716年にピョートル大帝はその複写を命じ、のち7年戦争のさい、1760年に原本がペテルブルクの科学アカデミーに移された。

3. モスクワ宗教アカデミー本 15世紀の写本で、ラジヴィル本より確実である。6714(1206)年からラヴレンチ本といちじるしくことなり、ロストフ公国の記事を多く含んでいる。

4. トロイツァ本 カラムジンがトロイツァ大修道院で発見したものであるが、原本は1812年のモスクワの大火で焼けた。15世紀の写本で、1408年までの記事を含み、ラジヴィル本に似ている。カラムジンは、その『ロシア国史』のなかに、トロイツァ本の抜粋をのせており、近くはブリショリコフが原本の複元をこころみた。

以上がラジヴィル本系の写本である。

5. イパチ本 科学アカデミーに所属し、前四者と系統のことなる写本である。1425年ごろに書かれたもので、コストロマのイパチ修道院に保管されていた。この写本にはラヴレンチ本系の写本とのくいちがいが目だつ。書きだしのところでは、「…フェオドシのペチエルスキー修道院の修道僧のすぎし年月の物語である」^⑦ となっており、また、6618 (1110) 年にシリヴェストルの「あとがき」がなく、ラヴレンチ本の終わっているところからさらに記事が書きつづけられている。翌6519 (1111) 年以下の記事も、まったくことになっており、『キエフ年代記』、『ガリチ・ヴォルィニ年代記』が含まれている。

6. フレブニコフ本 16世紀の写本で、かつてコロムナの商人フレブニコフが所有していた。この写本の大部分は、14世紀の南ロシアの年代記集成を含み、イパチ本系ではあるが、かなりくいちがった個所があり、イパチ本より古い形を伝えていると思われる。なお、この写本の書きだしは、「…フェオドシのペチェルスキー修道院の修道僧ネストルの、すぎし年月の物語である」^⑦となっている。ネストルの名がでてるのは、この写本だけである。

2. シャフマトフ以前の研究

ロシア史学の父であり、年代記を史料にして初めてロシア史を書いたタチシチェフ(1686—1750年)は、イパチ本、フレブニコフ本の書きだしの句をよりどころに、年代記の作者をネストルと考へた。だが彼は、6601 (1093) 年の項の「神の罰」にかんする話のあとに、「アメン」という語のあるのに注目し、昔の著述家はこの語で著作を終ることが多いのを理由に、ネストルの筆はそこで終っており、そのさきを6618 (1110) 年まで書きついだのは、ラヴレンチ本の記事にしたがって、シリヴェストルであるとしている。

年代記そのものを対象として本格的な研究を始めたのは、ドイツ人の歴史家で、招かれて1762—69年にペテルブルクに滞在したシレッツァー (1735—1809年) である。彼はノルマン派の創始者の一人であり、キエフ時代のスラヴ人の文化水準を低く評価していたが、厳密な史料批判、客観的な歴史記述の原則にもとづいて年代記を研究し、その成果を『ネストル』(1802—09年、ロシア語訳1809—19年)^⑧にまとめた。

彼は、ギリシア語と、ビザンツやその他の国の歴史とにくわしいネストルが一人で、ビザンツの年代記を模範にして6618 (1110) 年までの記事を書いたもので、シリヴェストルは著者ではなくて、ネストルの著作を書き写したにすぎないとしている。彼はまた、諸写本にあらわれた異文を校合することによって、誤りの除かれた、もとのテキストを復元できるものと考えていた。シレッツァーは、ネストルとその著作について、つぎのようにのべている。

「いまや、ロシアの豊かさを北方のあらゆる歴史の貧しさと、公平にくらべてみよう。ネストルの古さをスカンジナヴィア人、他のスラヴ人、ハンガリー人の若さとくらべ、ロシア史における完全さと一貫性を他のものにおける断続性とくらべ、ロシア史の誠実さと莊重さを、スカンジナヴィアやスラヴやハンガリーの年代記作者の輕薄な思いつきとくらべ、また16世紀にいたるまでの彼らのあらゆる後継者たちとくらべてみよう！…長いあいだネストルは、同業者たちのあいだでただ一人の年代記作者であった…もう一度くりかえしているが、ネストルはこの広大な舞台

において、ただ一人、本物の、いわば完全な（奇跡によらない）年代記作者であった」^⑧。

これは、きわめて高い評価である。シレッツァーにとっては、当時のロシアの文化水準の低さのなかで生れたこの年代記のすばらしさは、例外的な現象に見えたのであり、したがって彼には、なぜネストルが母国語で（西ヨーロッパでは外国語（ラテン語）をつかっていた）、このような自国の歴史を書く気になったのか、不思議に思われたのである。

おなじような評価は、『ネストル』に序文を書いたミッレル（ミューラー）にもみられる。彼もドイツ人出の歴史家で、ノルマン派の高名な創始者の一人である。「ネストルと彼の年代記の後継者とは、ロシア史の一貫性をつくりだした。それは、どの民族も、多年にわたって絶えることなく書きつづけられたこのような宝物を誇るができないほど、完全なものである」^⑨。

ノルマン派のドイツ人でさえ、このようにほめているのだから、ロシア人ならなおさらと思えそうであるが、かならずしもそうではない。懷疑派の代表者であるカチェノフスキー（1775—1842年）は、ドイツ人と同じようにキエフ時代の文化水準を低く見、そこからドイツ人とは逆に、年代記が11・12世紀ではなく、13世紀さらには14世紀に書かれたものであると判断した。彼は年代記を深く研究したわけではなかったので、その主張は受けいれられなかったが、年代記研究にたいする刺激にはなった。

カチェノフスキーにこたえて、1840年にブトコフ（1775—1857年）が、『懷疑派の中傷にたいするネストルのロシア年代記擁護』^⑩を書き、ラヴレンチ本とイパチ本とのくいちがいから、ネストルが6621（1113）年まで年代記を書いたものと考えた。彼によれば、シリヴェストルはただそれを書き写したにすぎないのである。

そのころ、1837年の勅令にもとづいて、古文献学委員会が進めていた年代記の系統的な出版の事業（それは、いまもつづいている）が実を結びはじめ、1846年にロシア年代記全集第1巻『ラヴレンチ年代記』^⑪が出版された。そこでは6618（1110）年までの部分は、『ネストル年代記の古テキスト』という表題がつけられている。そして、シリヴェストの「あとがき」、その以後の各写本の本質的なくいちがい、シレッツァー、カラムジンの研究をよりどころにして、6618（1110）年までがネストルの筆になるものとされている。

だが、序文の執筆者は「現在の構成におけるネストルの編年記を考察すれば、ラヴレンチ年代記のなかに残っている古いテキストが、最初にあまれたままの形で伝わっているとは断言できない」^⑫とのべ、その理由として、各写本がすこしづつちがっていること、ラヴレンチ本系の写本にネストルの名がみえないこと、ネストル以外の人物の筆が明らかにまじっていることをあげ、「『もとの』ネストルの編年記がラヴレンチ本に、その編集者が利用した他の素材とともにもち

こまれた」としている。

もっとも、ネストル編年紀はたいして変形していないものと考えられている。「1110年までのすべての基本的な記事は、上記の「ネストル」編年記から借用されたことは疑いないし、また聖なる年代記作者の筆によってそれが成立したままの形で残っているということは、かなり確信をもって推察できるのではあるまいか」。^④

いずれにしても、写本の校合から、ラヴレンチ本が著作ではなく、編集されたもので、それがネストルの筆をそのまま伝えたものでなく、素材としてより古い形（ネストルの原テキスト）の存在が予想されている点は、重要である。

その後スホムリノフが、『文学的遺産としての古ルシ年代記について』（1856年）^⑤を発表し、バイブル、バイブルから派生した物語、特別な資料からの信仰告白、キリル・メフォジ伝、ヴラジミル伝、ボリス・グレブ物語、フェオドシ伝、ビザンツ年代記などが、年代記の素材として利用されている点を指摘した。これらはことごとくキリスト教関係のものであるが、年代記の素材が問題にされだしたことを物語っている。

一方、年代記の言語学的研究に最大の功績をもたらしたのは、スレズネフスキー（1812—80年）とその娘の手になる『古代ロシア語辞典』^⑥（1880—1912年）である。彼は独力で、年代記の各写本をはじめ、2700にのぼるばう大な古文献を分析し、例文として縦横に引用している。それは1958年にも復刻され、古代ロシア語を読むうえでの唯一の辞典として、こんにちもなお生きつづけている。「一度この辞典を利用したものは、その不完全な点や欠陥に気づきながらも、なおその真値を理解し、それを尊重するであろう…スレズネフスキーの辞典は、ロシアの史的辞典編集の壮大な記念碑である。たとえ古代ロシア語のより完全な辞典が出版されるにしても、あらゆる古典的な労作とおなじように、その歴史的価値をけっして失うことはないであろう」と、1958年版の序文で、バルフダロフは、スレズネフスキーの業績に賛辞をおくっている。

この辞典は、彼の死後に出版されたのであるが、年代記の成立についても、『古ルシ年代記の読みかた』（1832年）^⑦のなかで、スレズネフスキーは、年代記についての深い造詣にもとづいて、独創的な見解を発表している。これについてチホミロフは、つぎのように指摘している。「ただスレズネフスキーだけが（100年以上もまえに）、ルシの年代記作成のはじまりを、すでに10世紀に認めることが可能であると考えていた。しかしながら、古ルシ文学にきわめて深く通じていたこの学者の見解は、長いあいだ支持されることがなかった」^⑧。

またスレズネフスキーは、「リュトやヤロポルクの運命にかんするいくつかの物語を特別にあつかわざるをえないように思われる。それらは偶然に年ごとの部分に切りはなされてはいるが

「975—980年」, 一つのまとまった物語をなしている」^⑧ とのべ、それらがきわめていきいきと、目撃者の目を通じて語られている点に注目して、記録以前の口承文芸が年代記の素材として存在しており、しかもそれがかなり早い時期に文字に記録されたことを指摘している。

この素材の点で年代記研究を大きく前進させ、シャフマトフ以前の研究を総括したのが、歴史家のベストウージェフ・リュミン (1829—97年) である。彼は『14世紀末までのロシア年代記の構成について』(1865年, 学位論文) ^⑨ で自説を展開しており、その後ブロックハウス、エフロン社の『百科辞典』の『年代記』^⑩ の項目で、つぎのように指摘している。

「シリヴェストルが最初の年代記集成の編集者であったことが、明らかである。написахъ (書いた) という語は、ある学者たちが考えているように、けっして『書き写した』という意味にはとれない。ヴィドビツキー修道院の院長は、たんなる写字生であるには地位が高すぎる」。このように彼は、編集者としてのネストルを否定しているが、編集者がだれであったかには重点をおかず、「集成が12世紀の作品であり、そのなかにもっと古い素材が含まれているという事情が、はるかに重要である」として、それが著作でなく編集による集成である点を強調している。「すべてこれらの素材から全体が編集されたのである。いまではこの全体のなかで、一人の人物の仕事がどれほど加っているかを指摘するのはむづかしい」。

彼が素材としてまずあげているのは、『ボリス・グレブ伝』や『ヴラジミル伝』などであり、そこから「わが国では早くから、同時代人を感動させた事件の細部や、個々の人物、とくに聖人としてあがめられた人物の生涯の特徴を記録し始めたことが明らかである」とのべて、12世紀初めの年代記よりも古い時代に、記録のおこなわれていた点を指摘している。

ベストウージェフ・リュミンの功績は、素材のうちに口承文芸(オレゲの物語、オリガの報復物語、スヴァトスラフの遠征その他)が含まれていること、また地方(ノヴゴロド、ロストフ、チェルニゴフ)の記事が含まれ、したがってキエフ以外に地方でも年代記がつくられたことを指摘した点にある。

この、年代記が著作ではなく、編集にもとづく集成であるという見解が、シャフマトフによって詳細に展開されるのである。だが、シャフマトフに移るまえに、クリュチェフスキーを見ておく必要がある。

クリュチェフスキー (1841—1911年) が1904年に『ロシア史講義』第1巻^⑪ を発表したときには、すでにシャフマトフの研究が進んでおり、クリュチェフスキーも著作のなかでシャフマトフの名をあげている。とくにノヴゴロド年代記にふれたところで、つぎのようにのべている。「いくつかの年代記集成、とくにノヴゴロド起源のそのなかでは、わが国の歴史の最初の数世紀の記述が、われわれが修道院長シリヴェストルに帰する集成とは、あまりにもかけはなれていて、

このような相異を写本、もしくは校訂の不完全さによって説明することはできない。このことはアカデミー会員シャフマトフをして、11世紀末にあまれた特別な、より古い年代記集成があり、それが『中核』となって、それによってわれわれがラヴレンチ本で読むような集成が12世紀初めにあまれたのであると、想定せしめるにいたった」。^⑧

しかし、シャフマトフの研究もまだ完成しておらず、したがってクリュチェフスキーもこの点にはふかくふれないで、もっぱらラヴレンチ本の年代記をとりあげている。それはシャフマトフののちの体系とはかなりくいちがっており、19世紀末の年代記研究の成果を代表しているものと考えられる。

まず「年代記集成に保存されたこの時代の事件についての物語は、以前には『ネストル年代記』と呼ばれることになっていたが、いまでは『原初年代記』と呼ばれることの方が多い」^⑨として、『原初年代記』なる名称をとりあげている。そして、この年代記が素材を編集した年代記集成であり、古いキエフ年代記は『原初年代記』の一部をなすだけで、しかも11世紀なかばの記事から現われてくるにすぎないとしている。彼は集成のおもな素材として、つぎの三つをあげている。

1. 『すぎし年月の物語』——それは書きだしからオレグのキエフ占領まで。「882年におけるオレグのキエフでの即位について物語りながら、作者は、『彼のもとにヴァリャギおよびスラヴ人その他がいて、ルシと呼ばれた』と記している。これがまさに、ルシ、つまりルシの国の始まりであり、物語作者の与えた約束「年代記の書きだしの句」の履行である。このように、『すぎし年月の物語』は集成全体ではなく、集成の始まりをなしていて明らかにオレグの即位で中断されている物語にだけかかる表題である。この『物語』は、ヤロスラフの死「1054年」よりもまえにあまれ、「ヴァリャギ」諸公の招致と、オレグのキエフでの即位とが、その主要な契機となっている」。^⑩

2. 『ヴラシミルの時代におけるルシの洗礼の物語』——集成の6494 (986) —6496 (988) 年におかれ、12世紀の初めに書かれたもの。

3. 『キエフ・ペチェルスキー年代記』——ネストルが書いたもので、ヤロスラフの治世 (1019—54年) の途中から6618 (1110年) までを含む。

この三つを土台にして、その空白をうめるのにつかわれたのは、「ギリシア語から翻訳された著作、ルシで改作された南スラヴ人の著作、ギリシアとの条約、ルシの物語文学の最初の試作、および、ときにはオリガの報復のような完全な詩的物語、つまり歴史的叙事詩に発展した民間伝承」^⑪である。

これの一つにまとめあげたのが、シリヴェスルトである。6360 (852)年の項に「『ヤロスラ

フの死からスヴァトポルクの死まで60年』となっており、1113年におこったスヴァトポルクの死は、集成の骨組をなしている年代計算の限界をなしている。このように、集成はスヴァトポルクの後継者ヴラジミル・モノマフの時代になってから、つまり1113年以後の時代にあまれた」。^⑧

このように、クリュチェフスキーは、1110年で筆をおいているネストルと、1113年以後に編集をおこなったシリヴェストルを、はっきり区別し、両者の関係をつぎのように規定している。「ラヴレンチ本、およびそれに近い他の写本のなかにわれわれが読むことのできる、いわゆる『原初年代記』は、年代記集成であって、キエフ・ペチェルススキーの修道僧〔ネストル〕のもとの年代記ではない。このキエフ・ペチェルススキー年代記は原本の姿においてはわれわれに伝わらず、部分的には省略され、部分的には増補されて、原初年代記集成のなかに、その最後〔11世紀のなかば以後〕の、重要な部分としてはいつている…ネストルは原本の姿でわれわれに伝わらない最古のキエフ〔ペチェルススキー〕年代記の編集者であり、シリヴェストルは、最古のキエフ年代記ではない原初年代記集成の編集者であった。彼こそは、集成の構成に組みこまれた民間伝承とネストルの年代記そのものを含む筆録の物語との編集者であった」。^⑨

素材と編集の関係、ネストルとシリヴェストルの関係が、一応整理されている。だが問題は、その材料のあっかい方と組立て方にある。クリュチェフスキーの欠陥は材料の分析の粗雑さにあった。材料を分析し、その性格を明らかにして、はじめて組立てが可能になる。つまり、諸写本の厳密な校合による原テキストの復元をおこなってはじめて、諸テキストの相互関係が明らかになるのである。それを試みたのがシャフマトフであり、それはクリュチェフスキーの結論を根底からゆさぶるほどの、画期的なものであった。

3. シャフマトフの研究（年代記の復元）

ロシアの生んだ大言語学者シャフマトフ（1864—1920年）は、19世紀末のブロックハウス、エフロン社の『百科事典』の『すぎし年月の物語』^⑩の項目で、年代記の復元の可能性を指摘している。彼はそこで、つぎのようにのべている。

まず名称について。「この集成は、『ネストル年代記』、『ネストル編年記』、『原初年代記』、『シリヴェストル集成』とも呼ばれている。しかし、『すぎし年月の物語』の方が、正確さと客観性の点でこのましい」として、『すぎし年月の物語』を6618（1110）年までの記事を含む年代記の全体の名称としてとりあげている。ついで、「すべての集成を比較研究すれば、『すぎし年

月の物語』の最初の構成と範囲を復元することができる。年ごとの物語のすべての写本は、世界史とロシア史の主要な事件の年を示した年表の資料にしたがって、二つの主要な群にわけられる」として、第1群には 6360(852)―6621(1113)年の記事を含むラヴレンチ本、イパチ本その他をあげ、第2群には 6391(883)―6625(1117)年の記事を含むソフィア本およびノヴゴロド第4年代記をあげている。そして、二つの群を比較した結果を、つぎのようにまとめている。「『すぎし年月の物語』は、1116年に修道院長シリヴェストルによって編集された。最古編集の年代ごとの物語は1110年で終わっている。翌1117年に、シリヴェストルの作品は改訂、補足された。この編集は、ノヴゴロド年代記とだけ結びついて、こんにちまで残っている。1117年編集はシリヴェストル編集の写本に影響を与えた。その結果、つぎのような混合編集が現れた―イパチ本(第2編集の影響がきわめて大きい)、ラジヴィル本(影響はもう少し小さい)、ラヴレンチ本(影響はもっとも小さい)」。

この段階でのシャフマトフは、まだラヴレンチ本とイパチ本との差異を本質的なものと考えず、後者に1116年のシリヴェストルの「あとがき」が含まれていないのを、第2編集(ノヴゴロド系の写本)の影響によって説明している。

ついで彼は、シリヴェストルが編集につかった素材として、「おそらく11世紀末に編集され、のちの改作によって、つまりノヴゴロド第1年代記(委員会本、トルストイ本)と結びついて、こんにちまで残っている年代記集成」、「いくつかの条項がネストルの筆になるキエフ・ペチェルスキー修道院の年代記」、民間伝承その他をあげている。

ネストルとシリヴェストルについては、クリュチェフスキーと同じ解釈に立っている(というより、クリュチェフスキーがこの段階のシャフマトフの見解を参考にしているのである)。重要なのは、『ノヴゴロド第1年代記』に含まれている11世紀末の年代記集成の存在を指摘している点である。これを軸にして、『ロシア年代記最古集成の探究』(1908年)^⑧のなかで、彼の壮大な体系が展開されるのであるが、残念ながら初めにのべたように、そのいきさつがくわしくわからないので、チホミロフにしたがって説明すれば、それはつぎのような過程をたどった。

「もっとも新しい年代記の方がその構成の点から研究しやすい、ということを根拠にして、シャフマトフは新しいものから古いものへと探究を進めていった。このようにして、彼は最古の年代記からではなく、彼の考えでのちの14―16世紀につくられたと思われる集成の研究から着手した」。^⑨とくに重要なのは、『ノヴゴロド第1年代記』の利用である。「『ノヴゴロド第1年代記』と『すぎし年月の物語』をくらべてみると、これら両作品の初めの部分で、1074年までが一致していることがわかる。そのあとでノヴゴロド年代記にはキエフの記事がまだいくらか含ま

れているが、もはや縮小された形においてであり、それも1093年で終わっている。そのさきノヴゴロド年代記は、基本的にはただノヴゴロドの記事だけをのせている。このことから、『ノヴゴロド第1年代記』と『すぎし年月の物語』は、1093年で終わる同一の素材をつかったものと、推定できる。

『ノヴゴロド第1年代記』は、『すぎし年月の物語』よりもこの素材の構成を、最古の原文に近く伝えている。というのは『すぎし年月の物語』は1093年集成、つまり原初集成に含まれない多くの挿入記事を含んでいるからである…したがって、『ノヴゴロド第1年代記』のテキストは、『すぎし年月の物語』から挿入記事をとりのぞくことを可能にし、『すぎし年月の物語』の素材となった年代記集成の最初の構成について、より明白な知識をあたえることができる」。^⑨

このようにしてシャフマトフは、『原初集成』（1093年集成）の復元を試み、1916年にその『すぎし年月の物語』のなかで、『原初集成』にさかのぼる部分を大きな文字で区別し、『すぎし年月の物語』の編集にあたって加筆された部分を明らかにしたのである。シャフマトフは諸写本の比較から1037～39年にまでさかのぼり、つぎのような図式を完成した。

1. キエフ最古集成（1037～39年）——キエフに府主教座がもうけられたことと関連しており、書物の保護者としてのヤロスラフへの賞賛で終わっている。素材としては、1)地方的なキエフの伝承、歌、伝説、2)聖者伝（ヴラジミル、オリガ、ボリスとグレブその他）、3)ヤロスラフの治世に生きていた人物から聞いた記事、4)さまざまな記録や文書がつかわれている。

2. ヴノゴロド古集成（1050年）——ノヴゴロドに主教座の中心となったソフィア寺院が建てられたのに関連して、主教ルカとヴラジミル・ヤロスラヴィチ公の発意によってつくられた。『キエフ最古集成』を土台にして、ノヴゴロドの記事を補足している。

3. キエフ・ペチェルスキー第1集成（ニコン集成）（1073年）——ペチェルスキー修道院の修道僧ニコンが、『最古集成』を書きつづけ、1062年の項に同修道院の歴史にかんする記事のせる。

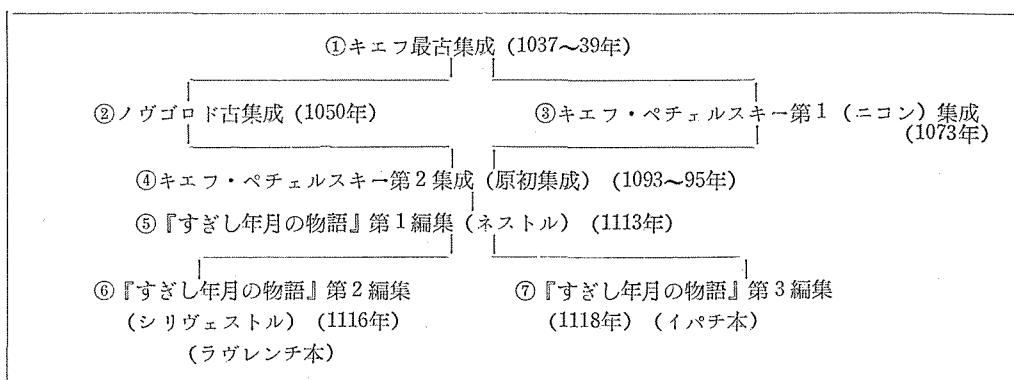
4. キエフ・ペチェルスキー第2集成（原初集成）（1093～95年）——『ノヴゴロド古集成』を1079年まで書きつづけたものと、1073年の『ニコン集成』を土台にして編集される。その結果、キエフとノヴゴロドの記事を統一した、全ロシア的な集成がうまれた。この集成は『ノヴゴロド第1年代記』に跡をとどめている。

5. 『すぎし年月の物語』第1編集（ネストル編集）（1113年）——ペチェルスキー修道院でネストルが、4の『原初集成』を補足して編集したもので、庇護者スヴァトポルク・イジャスラヴィチ公にたいして好意的である。

6. 『すぎし年月の物語』第2編集(シリヴェストル編集——ラヴレンチ本)(1116年) ——
ネストルの死後、ペチェルスキーに対抗するヴィドビツキー修道院で院長シリヴェストルが『ネ
ストル編集』を再編集したもの。11世紀末, 12世紀初めの記事を書くにあたって, スヴァト波尔
クの敵で, ヴィドビツキー修道院の庇護者であったヴラジミル・モノマフを前面に押し出した。

7. 『すぎし年月の物語』第3編集 (イパチ本)(1118年) ——シリヴェストルに対抗して, ペ
チェルスキー修道院でも『ネストル編集』を改作し, モノマフにたいしてさらに好意的な態度を
示した。

以上を図示すると, つぎのようになる。



ルイバコフはシャフマトフの業績について, つぎのようにきわめて高い評価を与えている。「年
代記の研究者のあいだにあって, シャフマトフは 高い山の頂のようにそびえている。彼は独力
で, 多数の写本からなるさまざまな時代のぼう大な資料に厳密な体系を与え, それらをたがいに
比較し, 原本を推察したり, 消滅した年代記の筋を再現したりすることによって, テキストが
加筆され, 筆写され, 編集されていく全段階を復元した。

科学にとって欠くことのできない大胆な仮説の設定と結びつけて, 数十万の事実をあつかった
巨人的な研究の結果, 第1にシャフマトフは, こんにちまで残っている諸年代記の成立時代がこ
となっており, その構成が複雑であることを立証することができた。

第2に, シャフマトフは, おなじように確信的に, 年代記作者についてのプーシキンやカラム
ジン風な性格描写に反対した。冷静な, 公平な, ほとんど冷淡ともいえる観察者としてのピーメ
ンの形象のかわりに, シャフマトフは, 政治闘争への活発な参加者, 事件の渦のまんなかにあっ
て事件に影響を与えようとがんばっている論争家としての形象を与えた。

第3に, シャフマトフは, 消滅した年代記の科学的な復元という形で, われわれに大きな遺産
を残した。彼自身は, それらの条件的な性格を強調することによって, 仮定的なテキストを絶対

視することをいましてはいるが、すでに明らかになったように、科学はこれらの復元を無視してはまったくなりたえないのである。これらはロシアの歴史思想の発展過程を理解させ、個々の環が、その後の研究者によって精密にされることを可能にしている」。^⑥

そしてまたチホミロフも、「シャフマトフの最大の功績の一つは、もっとも古い年代記の伝統が、『すぎし年月の物語』によってではなく、15世紀のなかばの写本に含まれている『ノヴゴロド第1年代記』によって、こんにちまで残されているという事実を確認した点にある」^⑦とのてべ、彼の年代記復元の努力をたたえとともに、その図式の最後の部分についても、「シャフマトフの図式のなかで、もっとも論争の余地のないのは、『すぎし年月の物語』に三つの編集が存在するという点である。この三つの編集の存在を仮定しなかったならば、ラヴレンチ編集とイパチ編集のテキストの異同を説明することができないであろう」^⑧と指摘して、その価値を肯定している。

シャフマトフの図式ができあがってからは、ほとんどすべての学者がこれにしたがっており、とくに『すぎし年月の物語』の成立については、問題が解決されたいえる（ルイバコフの新説については、あとでふれる）。スレズネフスキーの業績とならぶシャフマトフの業績は、年代記研究に時代を画すものではあったが、これによって研究が完了したわけではなかった。

彼以後の学者は、この偉大な業績を土台にして、素材その他の個々の問題をほりさげるとともに、『最古集成』の成立の問題、および一般に、ルシにおける歴史記述の始まりの問題に目をむけるようになった。

4. ルシにおける歴史記述の始まり

シャフマトフ以後で興味ある問題を提起したのは、まずプエルフェツキーである。彼は諸公の年代記が存在したこと、12世紀のキエフでいくつかの年代記が同時に書かれていたことを、1922年に指摘した。

ついでニコリスキーは、1930年に西スラヴ系の素材の存在に注目した。スラヴの分散、スラヴ文字の創作の話などがそうであり、後者はその断片が『すぎし年月の物語』の6406（898）年の項におさめられているが、年代記の改作にあたって、ギリシア人僧侶の影響のもとに、ルシと西方諸国との関係のべた部分がぬきさられたものとしている。

その後1940年にプリシヨリコフはシャフマトフをより精密化し、『すぎし年月の物語』とそれに先行する集成との連続性を強調した。

そのころ、ポクロフスキー史学を批判してロシア中世史学を確立したグレコフ（1882～1953年）が、『ロシア史の最初の作品』（1943年）^⑨を発表し、歴史家の立場からシャフマトフを乗り

こえることをめざした。彼はシュフマトフの偉大な功績をたたえながらも、つぎのようにのべている。

「彼はまるで解剖学者が死体をしらべるように、『すぎし年月の物語』をしらべた。だが、ちがった観点から『すぎし年月の物語』をながめることもできる。つまり、一つのまとまったものとしてそれを解剖し、受けとることによって、生きた作品としてながめるのである」。^⑧

グレコフは文字以前のロシア語の水準の高さ、口承文芸の豊かさにふれたあと、歴史の発生について、つぎのように指摘している。「文字に先だつ時代には、一定の群をなす歌が歴史の意義をもっていた。歴史的テーマをあつかった口承文芸のおもな任務は、英雄の名と功業を記憶にとどめることであった。このような作品では、英雄の系譜にも大きな注意がはらわれたが、それは一定の歴史的人物と結びついた事件の編年記へと、しらぬまに成長していった。宮廷の宴席には、ふつう公や王や彼らの祖先をほめたたえる物語の歌い手がはべっていた。これは全人類に共通した現象であり、当然、スラヴ人、アント人、とりわけルシ人のもとでも、そういうことがおこなわれたにちがいない…歌い手は自分の歌をつくり、それを歌った。というのは、その主題は主人公の功業にたいする関心をめざめさせることによって、聞き手の気にいったからである。このようにして、ルシの文字以前の歴史がつくりあげられたのである」。^⑨

一方グレコフは、文字による記録の発生を、教会や修道院の外に、公の政治と結びつけて、はやい時代にもとめている。「これ〔フランクの簡条書き風の年表〕に似た記録は、わがルシでも、ルシの国にかんする最初の総括的労作〔年代記〕がつくられるよりもまえにおこなわれていた。これを必要としたのは公の館であった。そこを中心にして、公のルシ国統治の手がのびており、そこで国の内外の問題が決定され、実行されたのである…このような慣行がいつ始まったのかをきめるのはむづかしい。ただそれが政治の大中心地で国家権力が強化されたとき、とくに、キエフが大ルシ国首都となったとき、つまり9世紀の後半から確立されたと断言できるにすぎない」。^⑩

豊かな口承文芸（歴史）の存在と、文字による記録の慣行——この両者が結びつくことによって歴史記述が始まるのであるが、グレコフはそれを、ヤロスラフの治世（1019～54年）に結びつけている。とくに、初めてロシア人イラリオンをキエフの府主教にすえたヤロスラフの反ビザンツ的独立心の旺盛さと、彼のときに建てられたペチェルスキー修道院のルシ統一の愛国的精神が、年代記編集事業に反映された点を強調している。そして、ペチェルスキー修道院の庇護者スヴァトポルクとネストルの結びつきによる『すぎし年月の物語』第1編集の成立（1113年）、スヴァトポルクの死後権力は政敵ヴラジミル・モノマフに移り、年代記編集事業もビザンツ派のフセヴォロドが建てたヴィドビツキー修道院に移され、モノマフと院長シリヴェストルの結びつきに

よる第1編集の改作，第2編集の成立（1116年），その後ベチェルスキー修道院とモノマフの和解による第3編集の成立（第1編集の改作）の過程を，グレコフは政治権力と教会権力のからみあいのなかに，いきいきと描写している。

彼は，「人類の天才のうんだ作品の一つで，運命によって幾世紀にわたって枯れることのない興味を定められた」^⑧『すぎし年月の物語』の編集者ネストルを，つぎのようにたたえている。「シンボルになりうるような名前が存在するものである。ネストルの名前がそうである。年代記作者ネストルの実在をうたがうものでさえ，偉大な修道僧の影がホメロスの名のように生きていたし，なお生きているばかりでなく，有名であることを認めないわけにはいかないであろう」。^⑨

グレコフもその根本的な立場はシャフマトフと変っていない。シャフマトフの体系に新しい修正を試みたのは，文学史家のリハチョフである。彼とても，シャフマトフの全体系にたいしてではなく，年代記発生のいきさつについて，新しい解釈をくださったにすぎない。彼は1947年に『ロシア年代記とその文化的・歴史的意義』^⑩に新説を発表して以来，1950年，1957年の『すぎし年月の物語』の解説，1958年の『ロシア文学史』にいたるまで，一貫してその立場を主張しているので，ここでは，『古ルシ文化史』（1951年）によることにする。

彼もグレコフと同じように，ルシにおける口承文芸の発展と，それが筆録文芸におよぼした影響を強調しているが，ヤロスラフの治世における年代記の発生について，つぎのようにのべている。「ルシの最古の年代記は，けっして一度に編集されたものではなく，その基礎になっているのは，仮りに『ルシにおける最初のキリスト教布教物語』とでも名づける聖者伝型の作品であったと考えてさしつかえがない。この物語には，オリガのキリスト教について，ルシの最初のキリスト教徒ヴァリャギについて，学者の長い話をともなったヴラジミルとルシの洗礼について，ボリスとグレブについて，ヤロスラフの啓蒙活動についての話が含まれている。すべてこれらの話は，教会と文化の独立にたいするルシの権利という，一つの思想と結びついている。物語の作者はルシの敬神をたたえ，強制によってではなく自発的におこなわれたルシのキリスト教帰依の思想をのべている。このルシの最初の，まだ年ごとにわけられていない歴史的な物語に，性格的にまったくちがった，民衆を土台にした記事をつけ加えることによって，ルシの年代記がしだいに成長していったのである」。^⑪

リハチョフによれば，純宗教的作品を土台にして，それにあとから世俗作品が加えられていった。したがって，教会のビザンツにたいする独立の精神が，ルシの政治的独立と国土の統一という思想に反映したことになる。カイエフはその『ロシア文学』（1953年）のなかで，「リハチョフはシャフマトフの図式の最初の部分に，いくつかの重要な修正をもたらした」^⑫と評価してい

るが、グジーは『古ルシ文学史』(1953年)で、リハチヨフ説に批判的である。「すでに最古集成において、口承文芸、民衆叙事詩、伝説を基礎にして、かなりの程度にルシの世俗史ものべられていたと考えるべきである。キエフ最古集成にすでに民衆詩の素材が広くとりいれられていたと考えていたシャフマトフは、このように推測していた。最近ではリハチヨフがこの点でシャフマトフに反対している。しかし、最古集成が世俗史の素材、とくに民衆詩をもとにして豊かになったのを、やっとキエフ・ペチェルスキー修道院の時代に行っているリハチヨフの観点は、有力な論証でうらづけられていない」。^⑤

歴史家のチホミロフにいたっては、さらに手きびしい。「著者は、多くの興味ぶかくはあるが、解決されていない比較のほかに、自説の正しさについて詳細な証明をおこなっていない…リハチヨフの構想の明らかな欠陥は、それがあまりにも粗雑であり、『すぎし年月の物語』と『ノヴゴロド第1年代記』の編集的性質を証明したロシア年代記にかんするこれまでの文献に、しかるべき注意をはらっていない点にある」。^⑥

歴史家の方からはチェレピンが、996年のジェシャチンナヤ教会の建立と関連して、10世紀末から年代記が現れる可能性のあったことを主張している。

チェレピンんのつぎにくるのがチホミロフである。もっとも、チホミロフの活動はすでに早くから始まっており、『ソ連邦史史料学』の第1版は1940年に出版されている。ここでは、1962年のその第2版、1955年の『ソ連邦史学史概説』、および1960年の第11回国際歴史学会(ストックホルム)での報告『ルシの歴史記述の始まり』にしたがって、大要を説明することにする。

まずシャフマトフの図式についてチホミロフは、「1073年のキエフ・ペチェルスキー修道院の第1集成から始めてシャフマトフの図式をとりあげるならば、それは無条件に注目に価する。これに反してシャフマトフの構想の残りの部分は、きわめて仮定的なものである」^⑦として、1037～39年、1050年の年代記の実在性をうたがっている。また、「このような図式においては、非教会関係者が活動する余地が残されていない。シャフマトフの図式は多くの研究者の著作で批判されたものの、初期のロシアの歴史記述に教会の著述家が支配していたという考えは、そのまま残っている」^⑧とのべ、文字の使用が世俗人のあいだでもおこなわれていたことから、素材ばかりでなく、年代記の編集にも世俗人の活動のあった点を強調している。

チホミロフは、研究の重点を最初の歴史記述の出現に移し、それまでの研究の欠陥を「年代記研究がおもに言語学的、文学的分析にもとづいてなされ、年代記に含まれている9～10世紀のルシにかんする記事の純歴史学的分析があまりなされなかった」^⑨点にもとめている。彼は年代記の復元にあたって、『ノヴゴロド第1年代記』のほかに『ウスチェグ年代記』をもとりあげ、つ

ぎのような結論にたっている。

1. もっとも古い記録は『ルシの10世紀諸公物語』で、6453(945)年から6486(978)年まで、つまりイゴリのドレヴリャネ遠征と死に始まるオリガの報復物語、オリガの洗礼、スヴァトスラフの遠征、スヴァトスラフの子らの紛争、ヴラジミルの即位を含み、1007年よりまえに書かれた。

2. つぎに古いのは『ルシの始まりの物語』で、8世紀末から6420(912)年まで、つまりキエフの建設、ハザルへの貢納、オレグによるアスコリド、シル殺害とキエフ占領、オレグの死を含んでおり、1043年ごろに書かれた。これには『ヴァリャギ招致伝説』は含まれておらず、この伝説が記録されたのはほぼ11世紀前半であって、キー伝説よりは古くはない。^⑨

最後にルイバコフが登場する。ルイバコフは考古学研究所の所長を勤めているが、最近はブリーナや年代記について、精力的な研究を発表している。彼の説で目だつのは、つぎの点である。

1. 1050年のノヴゴロド古集成は、シャフマトフのいうように教会関係のものではなく、反ヴァリャギ的な貴族オストロミルに関係したもので、『オストロミル年代記』と呼ぶことができる。それは反ヤロスラフ、反キエフの精神でつらぬかれた政治的パンフレットの性格が強い。

2. 『オストロミル』年代記に含まれていた、もともと反ヴァリャギ的な『ヴァリャギ招致伝説』を『すぎし年月の物語』にもちこみ、年代記全体を親ヴァリャギ的に改作したのは、第1編集者のネストルでもなければ、第2編集者のシリヴェストルでもなく（両編集に大きな差異がない）、モノマフの子ムスチスラフの監督のもとにおこなわれた第3編集の編集者である。

『すぎし年月の物語』の編集についてのルイバコフ説は、シャフマトフからチホミロフにいたる通説とくいちがっている。それがなりたつためには、「イパチ編集とラヴレンチ編集に共通しているテキストは、その原本「第1編集」のテキストでもある」^⑩という復元の原則と矛盾しないことが必要である。

ルイバコフは古ルシ国の成立の年代についても新説を提起しており、しかも年代記の記事をその根拠にしているので、ルイバコフ説については、彼の研究の全体系のなかで、改めて考察することにした。^⑪

(1964. 8. 26)

その後、米川哲夫氏の御厚意によって、1950年版の『すぎし年月の物語』と、リハチョフの『ロシア年代記』を拝借することができ、またシャマトフの『ロシア年代記最古集成の探究』をも貸していただくことになった。この小論にはまにあわなかったが、今後の研究に大いに活用していきたい。

(1965. 2. 1)

註

- ① Б.А.Рыбаков 《Древняя Русь—сказания, былины, летописи》, М.1963, стр.158.
- ② 同上
- ③ М.Н.Тихомиров 《Источниковедение истории СССР》, вып. 1, М.1962.
- ④ 《Лаврентьевская летопись》, Полное собрание русских летописей (ПСРЛ), т.1, Л., 1926 (М.1962), стр.1.
- ⑤ 同上, стр.286.
- ⑥ 《Ипатьевская летопись》, ПСРЛ т.2, СПб., 1908 (М.1962), стр.2.
- ⑦ 同上, 註
- ⑧ 《Нестор》, т. I—III, СПб., 1809—1819.
- ⑨ 同上, т. I, стр XLIV—XLV, XLVI [Н.К.Гудзий, 《История древней русской литературы》, М.1953, стр.46—47].
- ⑩ 同上, Введение, отд. V, §33 [Б.Д.Греков 《Избранные труды》 т. II, М.1959, стр.501].
- ⑪ П.Г.Бутков 《Оборона летописи русской, несторовой, от навета скептиков》 1804.
- ⑫ ПСР Л, т. I, 《Лаврентьевская и троницкая летописи》, СПб., 1846
- ⑬ 同上, стр. XIX (日本古代ロシア研究会『古代ロシア研究』, 第1号, XVIIIページ).
- ⑭ 同上
- ⑮ М.И.Сухомлинов 《О древнерусской летописи как памятнике литературном》.
- ⑯ И.И.Срезневский 《Материалы для словаря древнерусского языка по письменным памятникам》 т. I—III, 1890—1912 (М.1958).
- ⑰ И.И.Срезневский 《Чтения о древнерусских летописях》, СПб., 1862.
- ⑱ М.Н.Тихомиров 《Начало русской историографии》. (《Вопросы истории》, 1960, №5, стр.41).
- ⑲ 註⑰の31ページ [註⑱の42ページ].
- ⑳ К.Н.Бестужев-Рюмин 《О составе Русских летописей до конца XIV века》, СПб. 1868.
- ㉑ 《Энциклопедический словарь》. т. XVIII, 《Летописи》, изд. Брокгауз, Ефрон, 1896, стр.192—193.
- ㉒ В.О.Ключевский 《Курс русской истории》, ч. I, 1904 (《Сочинения》, т. I. М. 1956—以下引用はこれによる).
- ㉓ 同上, 94ページ
- ㉔ 同上, 76—77ページ
- ㉕ 同上, 82ページ

- ②⑥ 同上, 86ページ
- ②⑦ 同上, 87ページ
- ②⑧ 同上, 87—88ページ
- ②⑨ 註②, т.XXIV, 《Повесть временных лет》, 1893. стр.16—17.
- ③⑩ А.А.Шахматов 《Разыскания о древнейших русских летописных сводах》, СПб., 1908.
- ③⑪ 註③の60ページ
- ③⑫ 同上, 48—49ページ
- ③⑬ 註①の158ページ
- ③⑭ 註⑩の42ページ
- ③⑮ 註③の62ページ
- ③⑯ Б.Д.Греков 《Первый труд по истории России》 (《Исторический журнал》, 1943, №11—12) (《Избранные труды》, т.II, М.1959, стр.501—518——以下引用はこれによる).
- ③⑰ 同上, 501ページ
- ③⑱ 同上, 503—504ページ
- ③⑲ 同上, 505ページ
- ④⑩ 同上, 515ページ
- ④⑪ Б.Д.Греков 《Киевская Русь》, М.1949, стр.410.
- ④⑫ Д.С.Лихачев 《Русские летописи и их культурно-историческое значение》. М.—Л., 1947.
- ④⑬ 《История культуры Древней Руси》, т.II, 1951, Лихачев 《Литература》, стр.179.
- ④⑭ А.А.Кайев 《Русская литература》, ч.I, М., 1953, стр.254.
- ④⑮ Н.К.Гудзий 《История древней русской литературы》, М., 1953, стр.48—49.
- ④⑯ 註③の66ページ
- ④⑰ 同上, 63ページ
- ④⑱ Под ред.М.Н.Тихомирова 《Очерки истории исторической науки в СССР》, т.I, М., 1955, Тихомиров 《Исторические знания в Киевской Руси IX—XI вв》, стр.57.
- ⑤⑩ 註⑩の41ページ
- ⑤⑪ 同上, 45—56ページ
- ⑤⑫ 註③の31ページ
- ⑤⑬ この小論でふれた問題について, つぎの拙稿をあわせ読んでいただければ幸である。
年代記の史料としての利用, 復元については
『ヴァリャギ招致伝説のルシ (ノルマン説批判)』 (『立命館文学』228号, 1964年6月)
『ウスチュグ年代記考』 (『古代ロシア研究』, 第5号, 1964年)
ルイバコフの古ルシ国成立説については
『ロシア史における882年) 古ルシ国の成立年代)』 (『ロシア史研究』, 第11号, 1964年)